特集１

アジア初、２００５年世界選手権成功に向けて

８月のＩＯＦ（国際オリエンテーリング連盟）の総会で、日本での２００５年の世界選手権開催が決まって、早くも３ケ月が経った。招致の中心である愛知県オリエンテーリング協会はもちろん、ＪＯＡに世界選手権開催のための専門委員会設立の準備が進む、関東ブロックが支援のための決議をするなど、オリエンテーリング界を揚げての準備が始まりつつある。

これからの５年間は、世界選手権そのものを成功させる努力が求められていることはもちろん、日本のオリエンテーリングのターニングポイントとなる必要がある。東日本大会の参加者が首都圏開催にも関わらず６００人、そして全日本リレーにいたっては、４００人の参加である。こうしたオリエンテーリング界の状況を変えていく一つのきっかけ、世界選手権開催にはそうした側面も含まれている。

５年間は長いようで短い。この５年間に私たちはどんな活動をしていけばよいのだろうか。世界選手権招致に関わった落合、白戸、上田の各氏にオリエンテーリング界の現状と今後の展望について語ってもらった。また香港オリエンテーリング連盟の名誉秘書チャン氏には、同じアジアの隣人として、日本に対する期待について、寄稿してもらった。なお、落合氏の記事は、連載で掲載する予定である。

８月のＩＯＦ総会（オーストリア、グラーツ）で招致の演説をするＪＯＡ理事中島氏

ＷＯＣ２００５誘致への道

2005 年世界選手権準備委員会　事務局長　落合公也

●着想

1976 年にイギリスで開催された世界選手権は，日本のオリエンテーリング界にとって歴史に残るものだった．そのときが日本人の初出場であるし，34 年を経た今でさえもそのときの記録 26 位が日本人の最高順位であるからだ．

その記録を打ち立てた杉山隆司はまさに日本のヒーローだった．オックスフォード大学留学中にオリエンテーリングを始めた杉山は，イギリス国内では超エリート選手であるし，北欧のエリートとも互角に渡り合える実力であった．その杉山が初出場にして得た記録が 26 位である．杉山によって鮮烈な印象を植え付けられた世界選手権は，オリエンテーリングを始めて間もない少年であったぼくにとって，あこがれ，夢の存在となった．

世界選手権には多くの夢があった．選手として出場して活躍しようというのも夢である．一方で，オリエンテーリングという言葉が社会から忘れ去られて久しい日本国内でこのスポーツの普及という夢を果たすには，世間から注目を集めるイベントが必要であった．そのイベントこそが，世界最高峰のステータスを有する世界選手権であり，その日本開催も大変な夢なのである．

日本での開催はこれまでにも何度か検討がおこなわれた．有志によるテレインの視察もおこなわれていた．しかしながら幾多の障害が立ちはだかり，開催申請の提出にさえ至らなかったのである．

そのテレインの視察は愛知でもおこなわれていた．世界のトップ選手のスピードで 90 分というウィニングタイムの設定では，愛知のテレイン程度に斜面も急でヤブいところでないと，あまりにも広大な面積のテレインを用意しなければいけなくなるといわれていた．実際に 85 年のオーストリアの世界選手権は，あえて薄い緑のかかって岩の多いエリアを選んでコースが組まれていた．

1994 年に愛知県で報道されたニュースは，夢の実現を想像させるものだった．2005 年愛知万博の基本構想が発表されたのだ．万博のテーマは「環境」「自然との共生」だという．自然の中でおこなうスポーツ，オリエンテーリングが息を吹き返す千載一隅の機会だと思った．オリエンテーリングと同じ方向性を持つ万博にあわせて，オリエンテーリングのビッグイベントをやれば，世間の注目を集めることができるであろう．万博という国際イベントにあわせてやるならば国際大会，しかも 2005 年といえば世界選手権の年だから，やるならば世界選手権しかないだろう．そのニュースを聞いて，ぼくの気持ちは固まったのであった．

●ＷＯＣ９５

1995 年の世界選手権はドイツでおこなわれた．ぼくはアシスタントコーチとしてチームに帯同するチャンスを得られた．これは，世界選手権を選手の側からみることができる貴重な機会であった．選手の側といっても，かなり運営の内側を見られる位置であり，世

界選手権当日の運営を具体的にイメージすることができた.

この世界選手権で大車輪の活躍をしていたある運営者を見た，選手の鈴木康史くんは「あんな仕事をしてみたい」とつぶやいた．それを傍らで聞いた村越さんは「やったら」というそっけない，だけどとても期待ありげな反応を返した．もう傍らのぼくは万博が決まれば自分が誘致活動をするんだろうなと思った．2005 年万博の開催地決定は 1997 年 6 月となっていた.

●新帯さんと地下鉄で

1997 年の春, 現愛知県協会事務局長の新帯亮さんと何かの会合の帰りに地下鉄の社中で万博の話になった. 新帯さんの所属するつるまいＯＬＣの総会のときに, 万博がきまればイベントをしてもいいんじゃないかと話がでたという．そのとき新帯さんには，やるならば世界選手権しかないと伝えた．これが人に世界選手権の話をした最初であった.

大それた話だけに簡単には口に出せない．けれども賛同者は増やしていかなければならない．新帯さんからはもっとくわしく教えてくれということであった. 帰宅してすぐに，世界選手権に関する情報を電子メールで送った.

●万博開催決定

1997 年 6 月 14 日モナコから生中継されている博覧会国際事務局（ＢＩＥ）総会の模様を深夜にも関わらず見入っていた．この総会で 2005 年の万博開催地が決まる．日本の愛知とカナダのカルガリーが立候補していた.

名古屋市が 1988 年の夏季五輪誘致に失敗し，2002 年サッカーワールドカップの開催地として豊田市が選ばれなかったという苦い経験を愛知県は持つ. 国際イベントの誘致にケチがつき続いていた愛知県にとって，この万博の誘致は三度目の正直とばかりに是非とも成功させなければならなかった．カルガリーの激しい追い上げのなか，行政財界が一体となって誘致活動に取り組んでいた.

そのかいあってＢＩＥ総会での投票の後に読み上げられた票の数は，愛知 52 票，カルガリー22 票となり，愛知での開催が決まった.

また同時に 2005 年世界選手権の誘致活動のスタートが決まったのであった.

日本のオリエンテーリングの現状

白戸秀和

２００５年の世界選手権の愛知開催（WOC２００５）が決まりました。まずは、誘致活動に携われた関係者みなさんの努力に最大限の敬意を表します。

私自身は１９８９年以来、競技生活から遠ざかっており、一人の元ランナーに過ぎません。しかし、昨秋に２０００年ワールドカップ（W杯）、01 年ワールドゲームス、WOC２００５誘致という一連の世界的なイベントの予定をうかがいました。それ以降、マスメディアで経済を担当している立場を生かせる局面もあるかと思い、わずかながらも関わってきました。ここでは､WOC２００５成功に向けて、「オリエンテーリングと報道」「オリエンテーリングと企業の支援」という面から、今後を展望していきたいと思います。

私がこの１年間でとりわけ重視したのは４月に静岡で開催されたW杯です。今後の参考とするため、まずは当時を振り返ってみます。強国スウェーデンとＷＯＣ２００５の誘致で戦うＩＯＦ（国際オリエンテーリング連盟）総会を８月に控えていました。W杯は日本がＩＯＦや世界に誘致を実地でアピールできる最初で最後の好機。競技運営面での成功は何よりも重要ですが、報道や企業との関わりを進展させることが、W杯成功をWOC誘致に結びつけるとともに、WOCに向けて企業やメディアの関心を高める弾みになると考えました。

その際の具体的なポイントは、（１）露出のなるべく大きな報道（２）企業のバックアップ体制の明示（３）運営側へのスポンサード・マネーの供給――の３点でした。そのために採った戦略は、広告スポンサーとして企業からの金銭的支援を得て、新聞で大々的に報道する道筋を付け、広告費の一部を主催者側に事実上の協賛金として供給することでした。企業からの直接的な金銭供与を探る道もありましたが、準備期間が半年と短く、それはWOCで実現すべきことと位置づけました。いずれにせよ、99 年秋に東京都内で開かれたものの報道がほとんどなかったパークワールドツアーの二の舞は避けなければなりませんでした。

新聞社のトップ営業マンの協力を頂き、営業活動が始まりました。昨年 11 月のことです。彼のスクリーニングの結果、健康飲料を売り出し、スポーツへの支援を継続的に続ける大手食品メーカーなどに白羽の矢が立ちました。

広告業界では、企業が協賛するイベントの欠乏が問題になっていました。オリエンテーリングは、高成長時代が過ぎ去った日本の時代的位置づけから見ても「新機軸」と売り込むのに有利な要素をいくつも備えていました。「手あか」がついていないことが何より重要ですが、「自然」「自己責任」「ハードさ」「スタイリッシュ（格好良さ）」などのキーワードです。企業の反応は良好でした。企業としてオリエンテーリングの将来性を評価する声も聞かれました。

ところが、順調な滑り出しにみえた活動は、１０００万円規模の資金を実際に投入するという段階になるにつれ、実現性に不透明感が広がっていきました。理念への賛同はおおむね得られたものの、「市場規模はどの程度なのか」「競技団体はどの程度力をいれているのか」「競技者を含めどの程度積極的な活動を始めているのか」などの点で、明快な理解をいただくことができなかったためです。例えば、新進のイベントであれば、大抵は団体ぐるみで政治家さえ巻き込んだトップから草の根運動までさまざまな仕掛けがされているはずだが､影も形も見えてこないというわけです。オリエンテーリングという言葉は一般的に認知されていますが、いわゆる競技オリエンテーリングは、ほとんど知られていないことも改めて判明していきました。オリエンテーリングの総合力の問題でした。

「社会的認知が低い」という理由で企業はリスクを取ることに躊躇したようです。結局、それでも支援企業を獲得することはできました。予算規模を大幅に縮小し、４月下旬に毎日新聞の運動面の横で１ページを割いた特集面をつくることで体裁を整えました。また、新聞社としては赤字だったようですが、W杯実行委員会に少額ながらも協賛金を拠出してもらいました。参加者の少なさが国際的アピールにマイナスに影響す

るということが懸念されたため、その資金は学生の新歓行事への援助など参加者増のために使うことが条件となりましたが、スポンサード・マネーを獲得した実績も得られました。

悪天候で屋内で行われたW杯の表彰式の会場が新歓行事で訪れた学生に埋め尽くされたことや、１ページを使ったW杯を特集した新聞記事などが、W杯誘致やオリエンテーリングの認知向上にささやかながらも役立ったと思っています。

W杯では企業にとってオリエンテーリングが「将来性のある競技」との認識を持つにとどまり、私が当初期待したほどの大きな成果はあと一歩というところで得られませんでした。しかし、逆に考えると、オリエンテーリングの将来性を確認できたました。このことには大きな意味があります。W杯はWOC２００５における対企業、対マスコミの取り組み方を構築する上で、希望を与えたとともに、課題と解決策を示す貴重な経験です。

WOC２００５の誘致に成功したこれからが、いよいよ本番です。W杯での経験で分かったことは、ひとえに社会的認知の低さです。WOCの開催そのものは、地図や運営の面で多くの困難を伴うでしょう。いくつかの国際大会を開催した実績がありますが、過去のどの大会をも大きく上回る作業量です。ただ、オリエンテーリング界内部のこれまでの取り組みを強化することである程度解決できる問題であるはずです。社会的認知は一朝一夕では解決しません。従来の企業や報道機関へのアプローチにとどまれば、その成果もW杯に見られた範囲にとどまる可能性が高いと思われます。

どのような形でWOC２００５を迎えるのか――。WOC２００５を考える時に、まず目標を設定する必要があると思われます。W杯が開かれる日、日本選手は表彰台に上っているのかどうか。オリエンテーリングの人口は何千人なのか何万人なのか、あるいは何十万人なのか、などです。設定の仕方によって、今後必要な処方せんも大きく異なるからです。ただ、少なくとも企業の支援を得たり、報道の関心を得るには社会的認知が必要であることはW杯の経験から明らかなので、ここでは立ち入りません。

競技や運営への準備だけでなく、社会的認知を得る取り組みはオリエンテーリング界に総力戦を求めているようです。１人でも多くの人に競技オリエンテーリングの存在を知ってもらうことは極めて重要です。総括的な戦略を今ここで提案するだけのノウハウはありませんが、いくつかの例を挙げて参考にしていただけたら幸いです。

今年８月に山梨で開催したトータスの３日間大会では、一般紙、スポーツ紙、テレビ、ラジオなど計 10 社程度に、取材の申し込みをしました。結果は、ＮＨＫの山梨ローカルでメンバー出演による事前報道、地元紙の大会当日の雑観報道、地域紙の事前・事後報道の３社から取材を受けました。ＮＨＫ以外の２社は、開催地域での人的つながりで実現したものであり、単に依頼しただけで取り上げてもらえたのはわずか１社。壁の厚さを痛感しました。ただ、それでも成果はゼロではありません。都市圏以外では意外と地域の情報は取り上げられる可能性が高いでようです。大会開催にあたり、地域の報道機関に声を掛けてみるという試みにはなったと思います。

一般の方々の目に触れるだけでなく、実際に体験してもらうことも重要です。普及活動は最近さほど活発であるようには見受けられませんが、地域クラブや大学クラブでの地道な活動は今後の礎になるように思えます。可能であれば、普及に関心のあるクラブや団体がネットワークを構築して情報交換やノウハウの向上などを図れば、より有機的に普及活動が進むのではないかと思っています。

また、夏のトータスの大会では地域住民向けの体験クラスを設置しましたが、期待ほどの参加者を得られませんでした。地域との結び付きを強化することはもちろん大切ですが、オリエンテーリング大会に人を呼ぶだけでなく、逆に人がたくさん集まっている場所でオリエンテーリング大会を開くという発想も必要かもしれません。

W杯の活動である企業から「応援したいけれど、回りの会社も広告代理店も全く知らない。だから、なかなか踏み切れない」という言葉を聞いたことがあります。企業や学校などオリエンティアが生活する場やその周辺で、機会をとらえて宣伝を積み重ねることも大切です。すぐ近くに将来の協力者がいるかもしれません。また、オリエンテーリング経験者にWOC２００５の開催を理解してもらうようなことはそう難しくなさそうです。いずれもオリエンティア１人１人がすぐにでも取り組める行動なのではないでしょうか。

より多くの地域で、社会的認知の向上を目指した活動が始まれば、企業や報道機関が関心を持つ機会は格段に高まるでしょう。そして何よりも、最終的には公益法人である日本オリエンテーリング協会（ＪＯＡ）によるオリエンティアへの支援やWOC２００５を見据えた活発な活動が不可欠なのは、W杯の例を挙げるまでもありません。

「オリエンテーリングとは、地図と方位磁石を使って・・・」　WOC２００５を伝える報道では、このような枕詞が消え去っていることを願っています。

世界選手権開催をきっかけに

上田泰正

世界選手権を始めて開催することになり、誘致に関係したメンバーが中心となり、大会の成功に向けて準備委員会が動き始めた。JOA の封筒にも、「世界選手権を成功させよう」のスローガンが刷り込まれている。ところで、「世界選手権の成功」とは何を意味するのだろう。何を持って「成功した」と言えるのだろうか。もちろん細かく見れば色々な要素はあるだろうが、最も重要な部分について意見を述べさせてもらいたい。

世界選手権である以上、世界の有力選手は必ず来てレースに臨み、チャンピオンが決定する。ここまでは、どんなやり方をしても実現出来る事である。もちろん、世界選手権にふさわしい地図とコース（非常にあいまいな表現であるが）を提供する為の技術を持った人間が片手にも満たないと言う問題はあるが、その数人の頑張りで、何とか実現出来るだろう。

しかしながら、これでは大きな問題が残ってしまう。世界中の選手たちを応援している観客が居るのだろうかと言う疑問。せっかくの地元開催なのに、日本選手の活躍の機会はあるのだろうかという心配。これらが全て解決して始めて、成功したと言えるのでは無いだろうか。単に世界チャンピオンが決めるためのレースが日本の愛知県で行われましたと言うだけでは、厳し

い言い方をすれば、何の意味も無い。地図の作成技術がすばらしく向上して、通常開かれている大会の地図の質も格段に良くなる。競技人口が爆発的に増加して、観客が会場を一杯にする。日本選手が優勝する。こう言った事が実現して始めて成功したといえるのでは無いだろうか。もっと言うと、こういう成功のイメージに向けて現在公称 3000 人、実態としては 1500 人居るオリエンテーリング愛好者が実際に活動する事自身が成功そのものと言えるのでは無いか。

これらの課題の中でも私が重視するのは、観客の存在である。4 月のワールドカップの時には、同じように世界のトップランナーが集まったにも係わらず非常に寂しい状況であった。一部の盛上げ部隊の人々が大きな声で声援を送っていたが、全体としては静かな会場であった。世界選手権では決して同じ状況を作ってはならない。誘致活動の資料では観客を 3000 人としている。現在の日本の競技人口が公称で約 3000 人（実態ではせいぜい 1700 人程度か）なのだから、外国からの観客も多数来てくれるとはいっても、ほとんどのオリエンティアが観客として会場に行く事になる。現実問題全員が行けるとは限らないので、今のままでは観客動員目標の達成は非常に難しいと言わざるを得ない。

これを解決するには、とにかく競技人口を増やす事しかない。オリエンテーリングという競技の特性からして、何も知らない人が見ても全く面白くない。オリエンテーリングの面白さを少しでも知っている人であれば、世界のトップランナーがしのぎを削っている姿は興味深く見れるはずである。ではどうするのかと言えば、答えはただ一つ、普及活動を本格的にやる事である。

現在、色々な形で普及活動が行われているが、組織だって行われているとは言いがたい。JOA にしても全国一斉 OL というような普及イベントを企画しているが、良い成果があったとの話はほとんど聞かない。全国一斉 OL の話題をマスコミが取り上げる訳でも無く、主催者側から積極的に広報しているわけでも無いのであるから当然かもしれない。ただやったと言う事に自己満足しているイベントは他にも多いのでは無いだろうか。世界選手権という求心力のある大会が開かれるのだから、この事実を最大限に利用して全国的に組織だった普及活動が今こそ必要である。

読図能力が問われ、自分の進む道を決定し、自分の進路を確認し、適宜修正しながら、より早く進む。しかも、自然の中で、子供から高齢者まで一緒に競技出来るオリエンテーリングは、まさに 21 世紀にふさわしいスポーツである。自然の中で知的な運動を行えるというのは、21 世紀のテーマである環境・健康・福祉といったテーマにピタリとフィットしている。したがって、きちんとした普及活動をやれば必ずや良い成果を得られるものと確信する。普及活動の具体的な中身が問題になるが、一つ言える事はこれまでの遣り方では駄目と言う事であり、キーワードとしては広報・情報流通である。今、新たにオリエンテーリングをやろうとする人に取って最も難しいことは、大会情報の入手である。この部分をきちんとしていく必要がある。これについて、私案はあるのでまたの機会に紹介させてもらう。一つだけ言える事は、こう言った活動に係わる経費を既存のオリエンティア全員で負担していく事である。個人あるいは特定の数人が遣っていたのでは意味が無い。大会参加費に上乗せするなどの方法で、オリエンティア全体として支えていく必要がある事を認識して欲しい。

地図調査者の育成とかチャンピオン獲得へ向けてのプログラムとかは非常に重要な命題ではあるが、誰でも出来る訳では無く特別な意識と技術を持った人間に限定されてしまう。しかしながら、競技人口を増加させる努力は誰にでも出来る事である。毎週のように開かれている大会に参加している人々は、誰よりもオリエンテーリングの楽しさ、すばらしさを知っているのだから、単に自分が楽しむのでは無く、未だ知らない人に伝え、体験させてあげる努力をして欲しい。そして、真の意味で世界選手権を成功させよう。

出会い、そしてこれから

ベラ・チャン
（香港ＯＬ連盟名誉秘書）

出会い

８月１日、私は、オーストリアのグラーツ空港に降り立ちました。私は、あるアジア人の男性にシャッターを押して写真を撮ってくれるよう頼むと、その人は即座にＯＫしてくれました。彼に礼をいい、税関に向かい、全ての手続きが終わった時、ＩＯＦの役員がやってきて、私を送迎バスに連れていってくれました。その時、さっきの男性がＩＯＦ総会に出席する日本代表だと知ったのです。私は５人の男性と名刺を交換しました。それは、古賀、鈴木、中島、青木、小山の各氏でした。

次の日・・・

ＩＯＦ総会の会場には、プレセンテーションと呼ばれるコーナーが設置されていました。そこでは、世界選手権に立候補している国が、そのＰＲ内容を展示しています。私はそこで、再び彼らに会いました。また私たち香港のコーチ・協会役員の昔からの友人である真とも。彼らは、そろいの緑のはっぴを着ています。そのはっぴは、日本の使命と確固とした環境保護のメッセージのシンボルのように見えました。

日本のすぐ隣にいるオリエンテーリングのパートナーとして、香港オリエンテーリング協会は、日本で２００５年世界選手権の招致を完全に支持していました。また彼らを信頼しているし、多くの他の連盟が同じように感じていると信じていました。

もっともエキサイティングな日

８月４日、ＩＯＦ総会の日です。日本が２００５年に世界選手権を開催することになるかどうか、真がＩＯＦの理事に選ばれるかどうか、全てはこの日に決まるのです。世界選手権に立候補している国が総会でプレゼンテーションをします。ここでちょっとした機械のトラブルがあり。これは、もう少しで総会の日の午前中に私たちに振る舞われた寿司の味を台無しにしてしまうところでした。でも幸いなことに、このアクシデントは、真のプレゼンテーションを色あせさせることはなかったし、結局彼らは招致に成功しました。

この大きな喜びに続いて、真がＩＯＦ理事に選ばれました。アジアの代表がＩＯＦに送り込まれたのです。香港オリエンテーリング協会を代表して、私は真、アジアのオールラウンドオリエンティアとその仲間たちが、これまでアジアにおけるオリエンテーリングの

発展のためにしてきた努力に感謝しています。また、真の絶えることのないオリエンテーリングへの貢献に対しても。

そして、これから

グラーツ空港の雨が、私たちと日本代表団を見送っています。私たちは、空港のレストランですてきな昼食をとりました。私は日本のＪＯＡ代表の人々に、一緒に手を取り、心を会わせて、アジアの普及を究極のゴールとしてやっていこうと言うのを忘れませんでした。その最初のステップは、互いに深くコミュニケーションをとりあい、将来の大会やプログラムで互いに参加しあうことです。私たちは、中国本土やタイペイ、韓国、タイなどともこうした目標を共有したいと思っています。

グラーツでの思い出を胸に留め、再びお会いしましょう。

ＰＳ　フィンランドやスウェーデンで出会った、シミズさん、ササクラさん、イマイさん、コジマさん、そして１０人の将来性ある学生さん！ベラは日本語の勉強を始めました。２００１年、秋田のワールドゲームズで、日本語を使う機会を期待しながら。

ＩＯＦ総会時のエリートとＩＯＦ総会代表団によるミックスリレー。　今後ＩＯＦ加盟国は手を取り合ってオリエンテーリングの普及に務める必要がある。そのためにもWOC２００５は重要な布石である。

「ＳＱＵＡＤは変わります」

新たな世紀を迎えるにあたり朗報が入ってきました。これを機にＳＱＵＡＤは変わります。

われわれWOC　SQUAD　JAPAN（通称：SQUAD（スコード））は、これまで約２０年間にわたり主に世界選手権に出場する日本代表選手の選考、強化を行ってきました。しかしながらその活動の成果は結果を見る限り十分なものとは言えません。選手たちにとってもけっして十分なものではなく、また一般オリエンティアからも理解を得ているものではありませんでした。

われわれＳＱＵＡＤの活動の趣旨は、世界の舞台で日本を代表して戦う選手たちを応援することです。しかしこれまで、方針として新たな展開を避けてきたため、活動の実体は発足当時のものとあまり変わっていませんでした。ボランティア団体である性格もあり、時代を経るに従ってメンバーは固定化し活動は停滞気味となっておりました。

２００５年に世界選手権の日本で開催されることが決定しました。この機会に、これまでの活動を大幅に見直し、さらなる選手の支援・強化する施策を積極的に実行していくため、われわれは変わります。変わっていくことを宣言します。

いままでの活動は、代表に選ばれた選手に対して向けられることが大半を占めておりました。しかしこれからは多くのオリエンティアの皆さんと選手との間の橋渡しとしての役割も担っていきたいと考えております。　これまでも、世界選手権出場に際しては、多くのオリエンティアの皆さんに賛助会員となっていただいたり、チャリティーイベントに参加していただきました。これには大変感謝しております。しかしこれからは、さらにより多くの皆さんと一緒に応援していけるような活動を積極的に行っていきます。是非ともわれわれに力を貸してください。

人を募集します。一緒に応援していくための活動に参画できる人を探しています。

オリエンティアの皆様から広い視野でのアイディアを募集します。どうしたら、世界水準でもっと強くなれるか。みんなで考えていきたいと思っています。

２０００年１１月５日

WOC　SQUAD　JAPAN
代表　宮川 達哉　連絡先：hakodate@beige.ocn.ne.jp